

---

# 交わる無限の愛色世界～テイルズオブエクシリア～

月詠輝夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

交わる無限の愛色世界～テイルズオブエクシリア～

### 【Zコード】

N9119X

### 【作者名】

月詠輝夜

### 【あらすじ】

本編のその後のお話です。

時間軸はバラバラ。

子供設定があつたり。

同じくサイトと重複投稿。

本編です <http://ncode.syosetu.com/n0683x/>

チャットです  
om/n0967x/  
http://ncode-syosetu.c

一歩、

また一歩、と

わたしは幸せに

近づくんだ

あれから、アルフレドからプロポーズを受けて一年と七ヶ月が経つた。会えない日は続いたけれど、左手の薬指にある婚約指輪がわたしの寂しさを和らげてくれた。そして今日は

「ふおお……、ヴォリテ、めっちゃ綺麗……！」

「素敵です……！」

「本当にお美しい」

『や、やめてよ、みんな……』

「ほら、ヴェリテ。主役が遅れちゃ意味ないでしょー。」

主役、と言われて顔の熱が上がる。今日は、わたしとアルヴィンの結婚式、なのだ。彼の仕事が落ち着いたのが丁度一ヶ月前。それからわたしは再びプロポーズを受けて、今に至るわけで。正直二十歳になる前に結婚するなんて、といふか、わたしが結婚するなんて思わなかつた。

「アルヴィンさんには勿体ないです」

「ほんとだよね……あーもう、だけど羨ましいよ、ヴェリテ！」

みんなはわたしのウェディングドレス姿を見てたくさん褒めてくれる。

『や、あの、でも……せひぱりこね、ちよつと脳強調されやが……』

ジューードに手を引つ張られながら言えば、大丈夫だよ、安心して、と満面の笑みで言われた。あの、いったい何に安心すればいいんですか。

「ほひ、しゃあっとしてーあ、ちよつと髪乱れてる。待ってね……  
はい、出来た」

『お母さんか』

相変わらずのジューードに笑顔が零れる。因みにまだこの姿はアルフレッドに見せていない。だから余計にドキドキしている。でもジューードたちのおかげで少しだけ自信が持てた。

「では参つましまようか、ヴフコトさん」

『うん、ローハン』

わたしには親がないから、代わりにローハンが隣で歩いてくれる

ことになったの。

小さな教会の扉の前、そこにわたしは立っている。緊張して、きゅ、とローランの服を掴めば、優しい笑みを向けてくれる。そしてその扉が開かれると、ふわり、とたくさんの花が舞い落ちてきた。その先に見えるのは、愛しい人の背中。バージンロードの両側にはジュードたちの姿。恐れ多くもガイアス王までが来てくれていた。あの暇なのかしら、とか思つてない思つてない。

「や、腕を組んで」

『は、はい！』

ぼーっとしていたわたしはローランに促され、慌てて彼と腕を組む。そしてバージンロードをゆっくりと歩いてアルフレドの元へやつて来る。振り向いた彼はいつもと雰囲気が違つていて、ドキッ、と胸が高鳴った。

「ヴェリテ、か…？」

『ア、ルフレド…？』

いやいや、なんでお互い確認し合つてゐるんだ。田の前にいるのは紛れもなく彼だというの。だってかつこいいんだもの。ほう、とお互いが見惚れてくると、ローハンがわたしの腕をアルフレドの腕と絡ませた。

「おー一人とも、惚けは後にしてくれださいね」

『ロ、ローハン……っ』

「つ……行くか」

なんとなくだけど、彼からも緊張が伝わつて来ている気がする。わたしは小さく頷いて、祭壇の前まで歩く。そしてオルガンの音に合わせて、祝福の讃美歌を合唱し、続いて祭司も兼任してくれたローハンによって聖書が朗読される。最後に夫婦の教えが述べられると、ローハンはわたしたちの前に歩み寄り、まずアルフレドの方を見やつた。

「あなたはヴェリテさんを妻とし、病めるときも、健やかなときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、真心を尽くす」と誓いますか?」

「誓います」

思えばアルフレッドを好きになるまで、いや、実際にこうなるまで結婚するなんて思わなくて、ただ彼の傍にいられたらって、ずっとそう思っていた。

「あなたはアルフレッドさんを夫とし、病めるとともに、健やかなるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、真心を込めて」と誓いますか？」

『はい…誓います』

人を疑い、信じなかつたわたしが、あなたに出会つて、恋をして、そしてこいつやつて結婚式を挙げて。夢のよつだつたけど、夢じやない。

次に指輪交換。この指輪は、愛と真心と変わらぬ貞節の誓いであるし、とお互いがお互に指に、結婚指輪を嵌めた。キラリと光るお揃いの指輪に自然と頬が緩む。そして

「では、誓この口付けを」

そう言られて、わたしとアルフレドは向き合つ。彼はわたしの顔にかかるたびエールを取ると、少しばかり頬を染めた。

「綺麗だ、ヴェリテ」

『アルフレド君、今日は一段とカッコいいわ』

そ、とアルフレドはわたしに頬に手を添える。わたしを映す彼の瞳。吸い込まれそうで、愛おしい。改めて思われる。ああ、やっぱりわたしはアルフレドを愛しているんだ、って。

「愛してる、ヴェリテ」

『わたしもよ、アルフレド』

口付けと共に、わたしたちを祝福するように教会の鐘が鳴り響いた。今、ここ一生の愛を誓つ。

ねえ//リラ、見てる?わたし今すつしべ幸せよ。//ララが叶つてくれているこの世界があるから、わたしは、わたしたちねいこに存在していられる。

こそ、と、続きは夜な、と言われたのは幻聴でしょうか。いいえ、彼の含んだ笑みが幻聴ではないと物語っています。わたしは顔を真っ赤にして顔を背けた。ジユードママに向で殴つてくれるよう頼もうかしい。

「お一方とも、手を

証書に署名をした後、ローレンに言われて手を重ねる。彼から祝祷をもらつた後、わたしたちは初めてみんなの方を振り返る。わたしはアルヴィンの腕に手を添えて、にっこりと笑つた。

「おめでとうーーー!」

みんながたくさんのお祝いの言葉をくれた。すくすく幸せだつた。余談だけど、ブーケトスはジユードが受け取ったとか。

永遠の愛を誓おう

今までこれからも

ずっとあなただけを愛します

結婚式ってこんな感じですか？

取り合えず流れと内容だけ教えてもらつて自分なりに書いてみたん  
ですけどぐだぐだすぎですね、はい…  
気に入つてくださいれば嬉しいです！

披露宴は…まあ書けたら書きます

間違つたらどうなれば指摘して貰いたいませ、はい切実にヨー

――（三）

Are you happy?

みんなにお祝いされて

今までにないくらい、

すく幸せです

結婚式が終わった後、披露宴なるものがあるということで、わたし  
たちはその会場に来ていた。席に座ると、ローインから開宴の言葉  
があり、次いでジユードからわたしたちのプロフィール紹介があつ  
た。まあちょっとアルフレドの扱いが酷かつたように思えたけど、  
でもそれはそれでジユードがいかにわたしたちのことを思ってくれ  
てるのかが感じられた。

次に主賓からの祝辞で、わたし方はまだ一年くらいしか一緒に仕事をしていないけど、バルーンさんが、アルフレドの方は、ユルゲンスさんが色々と話をしてくれた。普段聞けてない仕事の話とか、恥ずかしながら怒氣話を暴露されたりして、お互い顔を真っ赤にしていた。

「おー！ 人とも、ケーキカットですよ」

そう言われてハッとする。気付けば周りにカメラを構えたみんながいて少しふくつと肩を跳ねます。

『じゃ、じゃあ、行きます！』

ナイフを持っていたアルフレドの手に手を添えて、わたしたちはケーキにナイフを入れた。ってかこれどこまで入れんの？と迷って彼を見やれば、ピタリ、と真ん中くらいでそれを止めた。そしてそのまましばらく写真をパシャパシャと撮られ、それが終わると何やらレイアが満面の笑みでわたしたちにフォークを差し出してきた。

「何？」

「何つてファーストバイトだよー。」

『ファー…何?』

「知らないの?お互いがケーキを食べさせあつのー。」

えっと、つまりそれは、あーん、と言う意味ですかレイアさん。分かつたような表情をしていれば、それを押し付けられるわけで。

『え、ちょ、レイアー!』

「まじまじー。」

早く早く、と背中を押されてケーキの元へ戻つてくる。ちら、とアルフレドを見れば、なんかめっちゃいい笑顔してるんだけど。彼はレイアからフォークをもらうと、一口サイズの大きさにケーキを切つた。

「ヴォリテ」

『！ や、あの…でも、人前…っ』

「いいから

悪戯っぽく笑うアルフレド。どうやらわたしに拒絶権はないようだ。  
顔を林檎のよつて真っ赤にして、わたしはおずおずと口を開ける。

「あーん

『あ、あーん…』

恥ずかしいから皿を離ると、むぐり、と口の中に皿の方が広がった。  
しかし、口いっぱいにケーキを詰められた様で、わたしは慌てて口  
に手を当てる。

『つな、向するのよ……ってかさつき一口サイズだったじゃないの

！……』

頑張つて飲み込んでしつ怒鳴れば、急に近づいてくるアルフレド。  
そのまま口元にキスされてわたしがそのまま固まつた。

「アーヴィング」

『ハーフクラクコームがつこういたらしき。彼は自分の唇についたクリームを舐めとり、ニヒルに笑う。

『ジニアードマム』

「うそ、出させてガハリト

「え、ちょ、待てってーーこれはほんの[只だ… ッツツツ…!]」

アルフレッドの悲鳴にならない声が響く。勿論会場のみんなは半眼で彼を見ていた。

『はい、あーん』

「……、ガーリテさん、なんの冗談ですか？」

やつと落ち着いた頃、わたしからのファーストバイト。ギラリ、と光るナイフの切っ先にカットしたケーキをぶつ刺して彼に差し出すわたし。それを見て口元を引き攣らせるアルフレドを余所に、わたしが満面の笑みでいる。

『え？・仕返し』

「仕返しにもほどがあるだろ……俺のロン中真っ赤になつりやうよーっ！」

『わたしの案じゃなくてジユードの案だからね』

「ジユード想ー？」

バツとジユードを振り向くアルフレド。冗談なことと言えば彼は冷や汗を垂らして苦笑する。気を取り直してわたしはフォークにケーキを乗せ、彼に差し出した。

『あーん』

笑つて言えば、アルフレドは僅かに頬を染めて、ぱくつ、とケーキ

を口に入れた。なんかこっちまで恥ずかしいな、これ。

「では、お一人の幸せを願つて、乾杯！」

そしてよつやく乾杯。色々なところでグラス同士がぶつかり合ひ音が聞こえる。こんなにも祝福され、今にも涙が出てきそうだったが、折角お化粧も直したことだし、ぐっと堪えた。

「乾杯、ヴォーリテ」

『うん、乾杯』

わたしたちは改めて乾杯して、グラスに入ったワインを流し込んだ。少し苦みのある、でも甘く後味のいいそれに、おいしい、と言葉が漏れる。そう言えばワインは初めて飲む。いや、未成年なんだけどね。

「ヴォーリテっ！」

食事が始まる中、真っ先にエリーがわたしの元へ来てくれた。少し髪も首も伸びて、さらに可愛くなつた彼女をわたしは笑顔で迎える。

『相変わらず可愛いわ、エリー。そのピンクのドレスも素敵よ』

「や、そんな…、ヴェリテに綺麗をには負けます。とっても綺麗ですよ」

ああもう、エリーほんとに天使。思えば一番最初に心を開いたのがエリーだった。同じ境遇だったはずなのに、エリーはちつとも村の人たちを嫌つてなくて、そんな彼女の優しさにわたしは感謝している。

「アルヴィンは相変わらず風紀を乱しますねー！」

くる、とアルフレッドの方に向いた彼女は眉を潜めて言ひ。どうやられっきのファーストバイトのときのことを見つけてるらしい。

「いさんときくらい許せよ、エリーザ」

「」あなたときだから」」です！少しば節度を保つてください！！じやないとヴォリテに嫌われますよ」

『あはは、エリー、またようになつたわね』

「えへへ……ヴォリテ、アルヴィン、お幸せに、です」

ティポが離さなくなつてからもう一年以上が経つ。旅していたころを思い出すと寂しくも思えてくるが、でもエリーの成長は心から嬉しい。親までとはいかないけど、姉として、かな。

それから今度はローエンがやってきた。

「」結婚、本当にめでとう！」れこます。おせかお一方の式でんな大役を任せていただけるなんて思つてもみませんでした」

『」うれしい、受けてくれてありがとう、ローエン』

「助かつたぜ」

「いえいえ。ジジイでもお役にたてたのなら光榮です。私はいつもお一人の幸せを願つております」

そう言つてローハンは優しげに笑つた。彼は本当に素敵なお人だと思つ。わたしが知る限り、どんな時も冷静で、それでいて確りと前を向いていて。二十年前のことがあったからこそなのかもしれない。

次に軽やかな足取りでやつてきたのはレイア。

「あーもうー！ほんとアルヴィンには勿体ないよねーーー！」

「おい。来ていきなりそれかよ」

「だつてわたしがもういちじやいたこくらいだもん！」

腰に手を当てて、ふんつゝと鼻息を拭くレイアに、小さく笑いが漏れた。

『やだレイア。その氣ならいつでも行くわよ』

「ヴヨリテ.. <<

『冗談つてわかっていてもお前らの本気だから怖いよーーー』

レイアはいつも元気でわたしまで笑顔になっちゃう。いつもこうりのいいところ大好きだし、なんせ結構趣味もある。姉妹ってこういう感じなのかな。

「ヴェリテ、幸せになつてねー。」

『ありがとう、レイア』

満面の笑みで言つてくれるレイアに、わたしも笑顔で返した。

レイアを見送つた後、肩を叩かれたわたしが振り向けば、そこにはジユードがいた。

「おめでとう、ヴェリテ、アルヴィン」

「おひー」

『ありがと』

ジユードは、そうね…相変わらずお人好しだけど、でも自分のことのようにわたくしたちの結婚を喜んでくれたり、結婚式の準備も手伝つてくれたみたいで、すごく感謝してる。

「ほんとに綺麗だよ、ヴェリテ」

『ジユード…』

「おこいじりともめくなワーリテ」

ジユードの柔らかい笑みにキュンとすると後ろから会えルフレデに頭を掴まれた。痛い。痛いですアルフレデさん。

「もう、アルヴィンは相変わらずなんだから……ヴェリテ、嫌になつたらいつでもおいで」

「優等生もなんでそんなこといつのかね……」

『あはは、おえとく』

「セレブリティしないのかよー?」

慌てるアルフレデを見てわたしがジユードは顔を見合させて笑った。

それからガイアスや、バルンさんや、ゴルゲンスさん、それにドロッセルも来てしてくれてすご~く嬉しかった。一番来て欲しかった人には来てもらえたかったけど……ほんとに、ほんとに幸せな一日だった。たくさんお祝いしてもらえて、たくさん笑顔をもらって、わたし、すげえ幸せだ…

「泣くなよ、ヴェリーテ…」

『うふ… う、うふ…』

溢れた涙が止まらなくて、そんなわたしの涙をそつと彼が拭ってくれた。

「これからもうと幸せにしてやるから」

『つばか…』

頬に触れている彼の手にそつと手を重ねて小さく笑う。ああでも、これ以上幸せになつたらどうにかなつちゃいそつな気がしてきた。

Are you happy?

これから先何があつても  
わたしはあなたと共にありたい

披露宴つてこんな感じですか

なんか、あの、アル憫になつてゐるようななつてないようなw  
取りあえずアルヴィンごめん^o^ o^

ファーストバイトは暖笑からの提案(?)

ちゃんと意味があるみたいなのでやつたらいい感じだと助言を頂き  
まして……でも、うん、「めん、なんかふざけてますね、そこ  
次はリクエスト頂いたものを更新していくらしいなと思つてます

^ ^

頑張りますね^(>○<)^

間違つてるとこないであれば指摘してくださいませ、はい切実にヨコ

――三

Happy Halloween!?

お菓子くれないと

悪戯したいやつぞ!

……わかった

「「トリックオアトリート!...」」

そんな楽しそうな声でわたしは目覚める。まだ重たい瞼を開けて目に入ったのは奇妙な格好をしているレイアとヒリーザ。

『いや、可愛いけど…何?』

「ヴァーリーティーはハロウィン知らないの!?」

わたしは頷く。聞けば地靈小節の末にある行事だとなんとか。わたしはそういうイベントに関する本は読んだことがなかつたので無知なのだ。

「ひつやつて仮装して、お菓子くれないと悪戯するモード、つて他所の家を回るんだよ」

『成る程』

レイアは魔女、エリーは小悪魔の仮装らしい。つてか久しぶりに会つてですか。それよりまだ辺り暗いんですけど。わたし寝たの一時間前じゃん。

「ヴァーリーテ、お菓子頂戴、です!」

『うーん、悪いけど持つてないのよね…』

「ええ、とポーチの中を漁るが飴玉ひとつない。すると一人が一斉にわたしに飛び掛かってきた。

『ぶつー?』

わたしはベッドに押し倒され、ニヤニヤと笑う一人に口角を引き攣らせる。

『な、何を…』

「お菓子くれないと悪戯ですー。」

「だからヴェリテ、大人しく犠牲になつてねーー。」

『ひ…つ、うわあああああー?』

無理矢理一人に服を脱がされて、何故か包帯をぐるぐると巻き付けられた。一人曰くミイラ女ならぬ包帯女だというのだが、これは些か、いや、かなりヤバいんじゃないのか。

『やだやだやだやだ……！』んな格好で出ていくなんていやあああ！

わたしは弓を擱られて、三つたちがいる部屋へと向かっている。

「お菓子くれなかつた罰です！ほら、ヴヨリテつ！」

『エリー あなたは悪魔か！！』

「小悪魔です」

『それは仮装の話でしょ！』

いくらわたしが叫んでも一人は止まってくれなくて、結局部屋の前に来てしまったわけで。

「アルヴィンもいるよ、ヴェリテ」

『なんのイジメ！？や、ちょっと、レイアつエリー』

静止の言葉も聞かず、レイアとエリーは部屋の扉を開ける。そこにはジユードとローベン、そしてアルフレドがいた。ジユードは目を見開いて持っていたフォーカクを落とし、ローベンは髪を撫でながら笑つていて、アルフレドは顔を真っ赤にして口を開閉していた。

『つだから嫌だつたのにイー!』

バツと顔を手で隠し、わたしはみんなに背を向ける、いや、向けちやダメだ。今のわたしは体のラインがハツキリしてゐるし恥ずかしい。恥ずかしいってもんじやない。

女としての恥じよーーこんな露出の高い服着たことない…服つて言えないので!

「帰つちゃダメです!」

「ほーらー・みんな待つてたんだからつ

『いー やー だー つーー』

必死に壁にすがりついて抵抗する。みんなの、しかもアルフレドの前でこんな格好とか有り得ない。死んだ方がましだ。

「ちょっと、アルヴィンもなんか言ってやってよー。」

『レイアーツツ！』

半泣きでアルフレドを見れば、じつとわたしを見、やがて口を開く。

「ナイスレイア」

『レモンの屑！――！――！――！――！』

そつままで真っ赤になつてた癖になんのあいつ。もつ泣きたい。  
ジョーダマア助けて。…とか思つてたら、ジョーダマアがコートを  
かけてくれた。

「みんな、ヴェリテをいじめやダメでしょ?」

その言葉にみんなは大人しくなる。わたしは嬉しくなつて思わずジ  
ュードに抱きついた。

『シマムラ』

ママじゃないって！ ってかヴェリテ、ダメだつてー！」

! ! ! !

咄嗟に自分の格好を思い出して慌てジョーダンから離れた。その瞬間、アルフレッドに抱き上げられて、わたしは自室へと連れていかれる。

「あーあ、やつぱりやうなつちやうへ。」

「レイアちゃんもヒューイーちゃんも、ウーリットちゃんはもう『結婚なれど』じゃなくて『おのづから離婚』にしなければいけませんよ？」

「でもヴェリテはあが似合つと思つたんですね…」

「つてかヴヨリテ… 食べられちゃう?」

# 「ぼ、僕の所為…？」

一瞬の出来事だったため、わたしは暫くキヨトンとしていた。ハッシュしたのはベッドに押し倒されてからだった。

「トリックオアトリート？」

『…………』

「Trick or Treat?」

『…………いや、発音良く言つても…………っ』

わっ！と今のわたしは耳まで真っ赤なんだりうなと思いつつ、彼から皿を返さず。アルフレッドはわたしの首筋に顔を埋めて、厭らしくそこを舐める。

『や、は…つあ、ん…っ』

ビクッ、と身体を跳ねさせると、次いで舐めた首筋に強く噛み付く

アルフレド。

『痛つー? な、立つあるの…。』

僅かに血の臭いがした。

「…………優等生に抱きついた」

『……嫉妬?』

「憑じかよ…。」

噛み痕を舐められ、ピリッ、と痛みが走る。彼の舌はそのまま首筋から鎖骨まで下りてくれる。

『や、っちょ…。と…。』

「折角レイアたちが誘ってくれたイベントだから我慢しようと思つた」

『ふあ、あ……ひや……ひー?』

「でもあんなとこ見せつけられたら我慢なんて出来ねえよ……」

『ア、ルフレ……ド……つ』

「じゃせお菓子持つてねえんだろ?なら悪戯せんみな

「ヒルに笑う彼を拒否する術はわたしにはなくて、そのまま朝まで付きました。

結局パーティーもやれずじまいで、明日に繰り越される」となった。もうちろんその日はひょんとした仮装で出席したから。

H a p p y H a l l o w e e n ! ?

もうあんな格好しないから……！

(ウーリテ、「めん……）

(あははジムードが謝る」とじやないから……)

(で、でも……すごく疲れてるし……)

(気にしない気にしない。それより、久しぶりに集まつたんだから

パーティ楽しむ？（「うんー」）

イラスト描いてついでに書いたもの♪  
別にハロウィン夢でも何でもない気がする  
取りあえずあんなふうになつた経緯を、と思つたらいひこと脱線  
しました…

時間軸は結婚して、家も決まってから、とか?  
ふたりの家にみんなが押しかけてきてー、みたいな^ ^  
でもちゃんとアルヴィンには許可を取つてたり。  
相変わらずぐだぐだ夢でしたm(ーー)m

> . i 3 4 0 1 3 — 4 0 6 1 <

2011・10・29

月詠輝夜

あなたの隣だから

わたしはいつも

笑顔でいられるんだ

広がる青空、吹き抜ける風、透き通ったエメラルドグリーンの海、  
白い砂浜。どれもがわたしの好奇心を揺る。今、わたしとアルフレ  
ドは休暇を取つて新婚旅行、といつものに来ている。ホテルの部屋  
から見える景色が何とも言えないくらい美しい。そう言えば旅が終  
わつてからも仕事があつたり何かと忙しくてこんなにゆっくりした  
ことは無かつた。

『素敵…!』

「お、氣に入つてもらえた?」

実はと言えば私の仕事にキリがつかなくて、この旅行のことはアルフレドに任せていたのだ。失礼かもしれないけど、ちょっと不安だつた。でも場所とか、ホテルとか、食事のメニューとか、全部素敵で恥ずかしながら子供のようにほしゃいでいた。

「ヴォリテの好み、もう全部把握してるからなー」

『じゃあわたしが今したいこと、当てるみてよ』

振り返つてにつと笑えば、慣れた手つきでわたしの腰に手を回して引き寄せせるアルフレド。

「キス、だろ?」

『正解』

どちらからともなくキスするわたしたち。結婚したら一緒に住もう、  
と言っていたのだが、わたしの仕事が意外と落ち着かず、今まで先  
延ばしになっていたのだ。だからこうやって会うのも結婚式以来、  
だつたり。

「あーもー、久しぶりにお前と一人つきりになれて幸せ……」

『ふふ、わたしもよ。ずっと仕事だったもの』

「仕事は落ち着いたのか?」

『実はまだ。でもバランさんが行つてきていいよ、つて有給休暇く  
れたの……つて、ここまで来てこんな話は嫌よ、アルフレド』

折角の新婚旅行だというのに仕事の話とはなんて花がないんだろう。  
口を尖らせれば、甘いキスの雨が降つてくる。

「分かつてゐよ。た、オヒメサマはどこへ行きたい?好きなどこ連  
れてつてやるよ」

『ほんとー?じゃあ、まづは…』

それから一日田と一日田は色々なお店を回った。自分の欲しいものを買つたり、ジューードたちにお土産だ、と一人で悩みながら選んだり、ちょっと休憩、と小さなカフェでお茶したり。アルフレド曰くわたしは終始笑顔だつたらしい。そういう彼もずっと笑っていたんだけど。

『海行』『、アルフレド』

「おふつ！？……朝から元気だなあ。ってかお前氣イ早すぎるだろ！」

次の日には海に行く気満々で早起きし、まだ寝ているアルフレドの上にダイブした。水着の姿で。

『あ、違う違う。サイズ確認しないで買ったから試しに試着してるのでだから、すぐ脱ぐ』

「もつお前、めちや似合つてゐし可愛いけどそれは誘つてゐよつ」と  
しか見えねえからな。ちょっとは自重してくださーーー！」

『わたしは別に嫌じゃないけど?』

こで、とアルフレドの上からベッドに落ちて、唇に人差し指を当てながら言えば、真っ赤に染まる彼の顔。そんなこと言つてるわたしもきっと真っ赤なんだろうけど。

「つまら、海行くんだろー？　せつやと着替えるー。」

『（弱いなあ）』

なんとなくこれがお互いの弱点だと思つ。わたしから迫れば彼が弱くて、彼から迫つてくれればわたしが弱い。こういうところは似た者同士、なのかな。

それから海にやつて来たわたしたち。そこについた更衣室で着替え  
て、先に出て待っていたアルフレドと会流する。

「……ヴェリテ。ちつきと違くね？」

『ああ、あれはこの下。だつてあんな肌出でるの人前で着られるわけないじゃん』

笑つて言えば残念そうに肩を落とすアルフレド。部屋で着てたのはビキニだけど今はパークーと脛辺りまであるスカートを履いている。

「来た意味ないんじゃねえの？」

『わたしはアルフレドと一緒に浜辺を歩くのだけでも嬉しいんだけどな』

「つ……お前には敵わねえよ」

苦笑いをして頭を撫でてくれる彼。今日は休みだからか、浜辺は昨日より賑やかだった。緩やかに揺れる海を見ながら、手を繋いでわたりたちは浜辺を歩く。吹く風がわたしの髪や頬を撫でて気持ちがいい。

「海、ヴェリテの瞳見たいだ」

『わたしの、田?』

「ああ。透き通っていて、それでいて綺麗な…でもエメラルドグリーンより淡い色……翡翠色、って言つたらいいか。その色、凄く好きだ」

トクン、と胸が鳴る。酷く優しい、わたしを見つめる彼の鳶色に引き込まれそうになる。そんな風にちゃんと瞳を褒められたのは初めてでなんだか不思議な気持ちだった。

「うそ、俺、やっぱりするのが好きだわ」

『つえ…?』

「俺が攻めてヴェリテが真っ赤になる方」

アルフレドはピタリと足を止めてわたしを引き寄せる。幸い話してるうちに人気のない岩場まで來ていたのでわたしはそれを受け入れた。もぞ、と彼の胸にすり寄り、背中に手を回す。

『…ばか』

「朝の仕返し」

『…好き』

「知ってる」

チク、と首筋が痛んだと思えばキスマークをつけられていって、わたしはさらに真っ赤になった。

勿論新婚旅行で、同じ部屋に泊まつてゐたため、その、夜の営みと言うのもありますて、四田田はぐつたりとしてたわたしであつた。今度から攻める時は気を付けないといけないと反省。でもこの一日はこれからのことについて色々と話し合つことが出来た。この旅行が終わつたら本格的に引っ越しを済ませようと話したり、家具とか生活用品も揃えなきやね、と笑つたり、時にはちょっとラブラブしたり。結構有意義な一日になつた。

五日目はホテル主催のダンスパーティーがあるということです、是非参加してほしい、と殆ど未経験のアルフレドと朝から練習したりし

ていた。貴族だつたアルフレードも少しづは嘘んでもと思つたのだが、二十年も前の話だ。

「覚えてねーよ…ってかほんとにダンスパーティー出んのか？」

『勿論！はい、続きね』

「はいはい、姫様の仰せのままに」

何だかんだ言いながらも飲み込みの早いアルフレードに感心する。ちよつと悔しかつたから難易度の高い課題を、ひとりでやつて、と彼に出した。

「え、むずつ……これ、ヴェリテは踊れんのかよ」

『ええ。自分が出来ないものを課題として出すわけなくてよ』

見ててね、とわたしは出した課題を難なく踊つて見せる。踊りは昔からの趣味だつたから色々な本を見て独学だけど大体はマスターしていたりする。自分の口でリズムを刻みながら、全部踊りきつた。

「はー… 趣味でやつてた割にプロ並みな感じねえって思つわ、ほんと」

『過大評価しちゃ。じゃ、次はアルフレードね』

「一気にには無理だぞ」

『わかつてゐるわかつてゐる』

それから数時間、間違つてるとこは多々あつたがなんとか最後まで通せたアルフレード。ビッグだ、と皿皿にいう彼が可愛くて小ちく笑つた。

「なんだよ」

『うつて、なんでも

「… ちょっと休憩ーお前とこもかしだい

がばつ、とベッドに座つていたところを押し倒されたわたし。ちよつとびっくりした。

「お前、ムカついたからあんな課題出したんだる」

『おお、バレた』

「素直だな、おい。まあそんな素直なところ好きだけど」

言いながら厭らしげ手つきで腰を撫でてくるアルフレドに一発肘打ちを食らわせた。見事顎にクリーンヒットして彼はわたしの隣で悶える。そんなつもりじゃなかつたのに、偶然つて怖い。

「酷くねえ？」

『あはは…』

それからもう暫く練習して、夜まではホテルの中を見回したり、散歩に行つたりして時間を潰した。パーティは七時から。わたしはホテルから貸し出されているドレスに着替えて、長い髪は邪魔にならないように上で纏め、普段はしないお化粧も少しばかりする。首にはしっかりと彼にもらつたネックレスをつけて準備を終わらせた。

「ヴォリテ」

『あ、アルフレドも終わつ…た、つ！』

振り向けば正装したアルフレドの姿があつて胸が高鳴る。普段は固めている髪も今は下ろしていて、着ている黒を基準とした服もたくさん細かい装飾がついてあって自然と彼の雰囲気に合っている。「ついこう格好もやつぱり似合ひ。ってか似合いますわ。

『カツコイイ…』

「う…おう…お前も、すっげー綺麗…」

『あ、りがと…』

なんだか恥ずかしくて顔を合わせられなかつた。けどそろそろ時間だからそんなこと言つてる場合じやなくて。

「行くか」

『うん』

わたしはアルフレドと共にホテルのホールに来る。あまり大きいと

は言えないそこには豪華な食事や飾りつけ、煌びやかな人たちがいた。ちょっと場違いじゃないかなとか思つたけど、大丈夫、と彼が手を引いてくれて安心する。そして曲が始まると、次々にダンスを始める人たち。そんな中、彼がわたしに向き直り、その場に軽く跪く。

「姫、お相手願えますか？」

『！　はい』

差し出された手に、自分の手を重ねた。

練習した甲斐あつてか、わたしたちは息の合つたダンスをする。そしていつの間にかみんなから注目されて、思わず足を止めそうになつたが、彼がリードしてくれた。

「このまま踊るつせ」

『え、でも…』

「いいから」

パーティー客が輪を描き、わたしたちはその中心でワルツを踊る。こんなこと滅多にないから恥ずかしかったけど、でもアルフレドと一緒にならなんとなる気がしてそのまま踊り続けた。

やがて曲が終われば拍手の嵐が巻き起こり、びっくりしながらもわたくしとアルフレドは顔を見合させて笑った。なんだかちょっと幸せな気分。

最終日は特にやりたいこともなく、部屋で一緒に過ごすこととした。でも時折何度か言葉を交わすだけ。彼の傍にいるだけで凄く暖かいから、それだけで十分だった。アルフレドもそれを分かってくれているから、わたしは自然と笑えるわけで。

明日からは引っ越しの準備しなきやな、と思いつながら隣の彼を見れば、規則正しい寝息を立てて寝ていた。なんだかわたしも眠くなつてきて、彼の肩に頭を預けて眠つた。

あなたの隣で

わたしは笑う

新婚、旅行：？

どんなものかよく分からなかつたから、取り敢えず楽しかつたらいいや、とガサガサ深夜に書きました（^\_^）

まあ毎回の「Jとくべタベタなどすけどねつww

旅行先は、まあどつかのリゾート地でいいです

エメラルドグリーンの海とかダンスパーティーとか妄想乙ですね！  
でも書いて楽しかつたですし、いいですよ、ね？

わたしが書くふたりつてラブラブなんですかね…

ラブラブ田指してるんですけど脱線しかけじやないですかね、肘打ちとか（・・・）

あ、ちゃんと家は決まつてるんですよ、なかなか引っ越し出来ない  
だけで

：なんかもうこの旅行現代風みたくないつてる

一応、リーゼ・マクシア、ですから

因みにエレンピオスとは合体？してたらいいと思つんです

シンフォニアみたくね^\_^

オチは相変わらずないです

次は何書こうかな（^\_o^）

あ、前話にイラストを書いておきました(\*ノノ)

2011.11.01

月詠輝夜

## ふたつやひとつひの繋がり

ヴェリテが笑つてゐなら

それでいいんだ…

いいんだけど…

ある日突然、ヴェリテが二・アケリアに帰る、と言いつけてきた。え、なにこれ、実家に帰りますとかそんなん?、とか、俺何かしたつけ?、とか不安になつたけど、どうやら兄であるイバルに会いたいといふことだつた。そういう結婚式の時も来なくて、コイツめつちや落ち込んでたよな。確か最後に会つたのは最終決戦の前だつた気がする。あれからもう一年以上は経つ。

「で、何で俺も?」

『あら、嫌だつたかしら』

クス、と笑つて俺を見る。ヴェリテは一年前より少しばかり大人びた。髪も伸びて、髪形も変えて、服装も…ちょっとエロイ。って何考えてんだ俺。

「いや、俺が行つてもいいのかつてこと」

『別に構わなくてよ。手紙にもあなたを連れて行くつて書いておいたし』

「手紙ね…逃げてなきゃ こいけど

『そう言えば、ピタリ、と止まつて、ヴェリテは俺を見る。何その顔。まさか考えてなかつたとか。

『それ考えてなかつた』

あーうん、やつぱり?っていうか可愛いんだけど。

『よしアルフレードー走るわよーー』

「は、ちよ、おまつーー待てってーー」

走つていぐヴェリテを慌てて追いかける。相変わらず行動的だな、なんて思いながら前を走るヴェリテに追いついて持ち上げた。所謂お姫様抱っこってやつだ。

『うわっーーちよ、アルフレードーー』

「相変わらず色気ねH声」

『ジャッジメント食ひひひへー』

「すんません」

俺の下で鳴いてる時は可愛いのに。そう言えば的確に鳩尾に鉄扇をぶち込まれた。容赦ねえのも変わらないよな、ほんと。

で、ヴェリテを抱えて走つて、ニ・アケリアまで来たわけだけど。

「巫子殿いねえな」

『わたしの家でしょ』

ああ、そう言えばそうだった、と思い出す。ヴェリテがあいつに自分の家を使ってもいって言つたんだつけ。ヴェリテに家とか俺一瞬しか入つたことねえのに。

『ぶつれこくくな顔』

「な…つ俺はいつもカッコイイでしょーよ」

『ふふ、うん、カッコいいわ、アルフレド』

にっこり笑つて言つヴェリテに僅かに顔が熱くなる。もつほんと、俺ことつたらヴェリテマジ天使。ってかそんなに不細工だったのか、俺。

『やつとつこた!』

ニ・アケリア参道から少し逸れたところに、ヴェリテの家はあった。辺りはシンとしていて滅多に人が立ち入らない場所である。

ガチャ、とヴェリテはそつと扉を開けた。

『ただいま』

入ったそこにはちゃんとイバルがいて俺は目を瞬かせた。まさかいるなんて思っていなくて。

「あ、お、おう…」

『何それ！妹が帰ってきたのに素っ氣なさすぎないー…』

「え、あの…お、お帰り…」

『うん、イバル！』

イバルは前とあんまし変わんなくて、逆に変わったヴェリテにビビッ

クリしたんだるつな。一年前なんて胸元なんて出せなかつたし、足  
だつてあれだ…「ハイブースの履いてて出せなかつたし。あ  
れ、俺変態じやねえ？

「お前もそんなど」突つ立つてないで入れよ

「おーおー、ヴェリテの家なのに主氣取り?」

「貴つ様…！」

『ふたりとも怒るよ?』

「「まいすみません」」

やつぱりイバルもヴェリテには弱いらしい。ほんとどつちが上か分  
かんねえよ。ちよつとは兄らしことに見せてやればここの

『イバル、いつもこんなに綺麗にしてくれてるの?』

「ああ。お前に借りてる分際だからな

『そつか、ありがとね』

すとん、とヴォリテは机の前に座る。俺も手招きされたので、ヴォリテの隣に腰を下ろした。

『手紙、送ったと思つたが、わたしたち結婚したのよ』

「…ああ、来てた」

「ヴォリテ、お前が来てくれなくて寂しそうにしてたぞ」

「それは……わかってる。でも」

パン、と手を叩いてヴォリテがイバルの言葉を遮った。

『そんな話をするためにここに来たんじゃないなくてよ』

「え…怒つて、ないのか……？」

恐る恐る聞くイバルに、ヴォリテは優しく微笑んで頷く。正直俺も怒つているからこいつに会いに来たんだとばかり思っていた。

『会いたかったから、来たのよ』

「ヴェリテ……」

「……」

『お、ちよつと待て俺。なんでイライラしてんだ。こいつらは兄妹だろーが。それっぽい雰囲気だけど兄妹じやねえかよ。』

『あ、俺お前が来るつて聞いて食事をだな……！』

『わあっ、本当…？ 嬉しいわ、イバル！』

『ちよつと待つてろよ…今すぐ持つてくるからな…！』

『あ、わたしも手伝うわ』

いや、ヴェリテは笑つてるからいいんだよ。兄妹のこと口出すなんて野暮なことはしない。

「ほらこれ、ヴェリテ好きだったり？」

『覚えててくれたんだ!』

「当たり前だろー俺を誰だと思つてる」

『ふふ、ありがとう』

くっそ。なんで頬染めてやがんだよ。確かにヴェリテは可愛いし笑顔とか天使だし気持ちは分からなくもないけど。あいつは妹に對して何頬染めてやがんだよ。あ、一回眞つちやつた。

『アルフレド、ぶつれこべ』

「それ一回田ーー」

「だがヴェリテが言ひへりに相当変な顔してたぞ、お前」

「お前らなあ……」

悔しくてふたりを睨み付けていると、何かに気が付いたヴェリテが俺の元に来てこそっと耳打ちしてくれる。

『嫉妬しなくともわたしはアルフレードのことだけが好きだからね』

「すさつー」と顔を真っ赤にすれば、にせにやと笑うヴォーリテの姿。俺はぐつと言葉を飲み込み、それから額に手をやって息を吐いた。

「何言つたんだ？」

『ふふ、イバルなら大体分かるでしょ』

「…ははーん、さては俺とヴォーリテのやり取りに嫉妬したな、ええ？」

「変なとこいやつぱり双子だなおまえら……つーかドヤ顔すんな」

なんでこいつにもバレたんだ、と深く肩を落とす。するとイバルが俺の向かいの席に着き、俺を見据えた。

「俺にとつたらヴォーリテは特別だつた

「え…？」

「俺が一番、ヴェリテの傍にいた

何故か急に真剣なムードになつて俺はヴェリテと顔を見合わせる。なんだかヴェリテもおろおろしてゐようだった。

「俺なんかより真っ直ぐで、一度決めたことは、絶対に諦めなくて

『イバル…？』

「兄妹だから、双子だから、全部分かつてたつもりだった。けどヴェリテはお前たちと旅して、俺じゃ成し得なかつたことを……人間嫌いを克服した。お前がいたから、なんだろ？」

ヴェリテと同じ翡翠のそれが俺を捕らえる。イバルの肩は小さく震えていた。そうだ、こいつはヴェリテと同じでプライドが高くて、なかなか人を認めようとしない。だがこいつは俺を…

「認めてくれるのか？」

「つだがいいか！？ヴェリテを泣かせてみるー！その時はだな

』

『イバル』

ヴェリテがイバルの言葉を遮り、今度は、ぎゅう、とそいつに抱きついた。いきなりのことによりバルは真っ赤になつて、だけど直ぐにヴェリテを抱き締め返した。

「ヴェリテ、？」

『やつぱりイバルはわたしのお兄ちゃんね』

「ヴェリテ、お前…」

僅かにヴェリテの声が震えていた。そう言えばこいつ涙脆弱かつたな、と目の前の双子をじっと見る。一卵性つても双子なんだよな、こいつら。イバルは分かつてたはずだとか言つたけど、お互いのことをちゃんと分かつてるじゃねえか。

『バカでシスコンでジジで』

「う」

『単純でプライド高くてすぐ人を信じちゃうけど』

「…」

『でも、それでも、あなたは唯一無二の家族だから、ずっと好きだつた…』

その言葉にイバルは目を見開く。思えばヴェリテはただの一瞬だけ自分の口からこいつに好きだなんて言ったことはなかった。けど伊達に双子じゃねえんだ。イバルだって本気で嫌われてた、なんてことはとは思つてなかつただろう。

「…ああ、ヴェリテ

それでもイバルは嬉しかつたんだろうな。<sup>ぎゅ</sup>、と、ヴェリテを抱き締める力を強くした。だから落ち着けつて。兄妹じゃねえかよ。

「好きだ、ヴェリテ

『わたしもよ、イバル』

だがそんなやり取りを聞いたら俺の中で何かがキレたわけだ。

「つだ……何お前……兄妹そろって俺をいじめてるわけ……？」

『ううん、アリテは舌を出して涙拭う。イバルも何故かドヤ顔。

俺は一瞬で悟った。

「あ、そう……からかつてたのな……」

なんか俺だけ惨めじゃねえ？よく考えたらアリテがからかうの好きなんだからイバルだって同じ可能性あつただろ。

『じめんね。あまりにも反応が面白かったから』

「仮にも義兄の俺に嫉妬するとは……」

「ひめーかーかーつか義兄ってなん……いや確かにそうだけども……」

その言動からして認めてくれたことは確かだろ。クスクスと笑う

ヴェリテに俺はばつが悪くなり、顔を反らした。それからイバルが作った料理を三人で食べ、少しの間、話をしてから帰ることにした。

「もう帰るのか？」

『ええ。仕事があるから。またそのうち来るわ』

見送るイバルに垂れた犬耳が見えたのは気のせいだろう。

「ー、今度はーー」

『ん?』

「俺が、行くから」

笑つて言つたイバルにヴェリテは驚いたが、すぐに嬉しそうに微笑んだ。まあ今日はふたりにからかわれたけど、結構楽しかったしよしとしますか。あーでもやっぱりからかわれるのはムカつくなあ。後で仕返ししてやるから覚えとけよ。

ふたつでひとつの繋がり

確かに繋がってる、って感じだな

(え、ちゅ、か、帰つてきっこなりなーあるのよ…。) ( )

(俺をからかつた罰?)

(なつーーわたしだけじやないわよーー)

(でも発端はヴーリテだろ?)

(だ、だけどーー)

(いーから、黙つて鳴け)

(やつ、ん、つ…)

あとがき

イバルがお兄ちやんらしく、といつこクエストでしたが、お兄ちや

んらしくできるか不安すぎてどうしようつ

その前にアルヴィン不憫すぎてる「めんなむこーー

からかうのが大好きな設定だったんで大いに使ってみましたその設定。

あとイバルの口調が迷子（笑）

取り敢えず三人のほのぼのを書いて満足です（^ ^ ^）

そして最後の最後であんなんすみませんほんとそーゆー思考なん

dげふんげふん

R18も書いたんだけどタグ付いてないからあげれないよなあ（・。・）

2011.11.05

月詠輝夜

## ゆめこみゆみこみ

あなたの色と  
わたしの色が  
混じりあって

いつものようにわたしは仕事場でバルンさんのお手伝いをしていた。  
少しづつ、少しづつだけどわたしたちの研究も世界の役に立つて來  
た。時間を見れば結構な時間を研究に費やしていたため、わたしは  
勝手場に立ち、お茶を淹れる。

『バルンさん、少し休憩しませんか?』

「ん？ああ、そうだね。ありがとう、ヴェリテちゃん

『いえ』

にっこりと笑つてお盆に乗つた湯飲みを持つた。瞬間、気持ち悪さが込み上がつてきて、ガチャン、とわたしの手から湯飲みが滑り落ちる。

「ヴェリテちゃんー？」

『は、う…う』

わたしは口を押さえて慌てて洗面所へ駆け込む。

『つ、うまつ、は、は…』

最近無理しすぎたから風邪かしら、と息を整える。そう言えばさつき湯飲みを割つてしまつたことを思い出して急いで仕事場へ戻つた。

『すみません、バルンさん!』

「いいよいよ、気にしないで。それより、イル・ファンの病院行  
こつか』

へ?病院?とわたしは首を傾げる。しかしバルンさんはにこにこと  
笑うだけで、わけも分からぬまま彼に連れられてイル・ファンに  
やつて来た。久しぶりに来たこには、以前と違つて明るく光が差し  
ていた。

「おめでとう、ヴェリテ」

『 は?』

そつ言づジユードにわたしが顔をしかめると溜め息を吐かれた。え、  
なんでわたしが溜め息を吐かれなきゃならないのよ。

「はい。まずは自分の体に出た症状を挙げてみて?」

『 症状? えーと、…熱っぽい。食欲が無い。吐き気。頭痛…かな  
?』

「言ひ終わったといひで、ん？」と眉を潜める。

「じゅあ田のものは来てる？」

『あ……来て、な……』

「 もう、わかるよな？』

わたしは口元を覆つゝて両手を当てた。嘘だと思つても嘘じやなくて。なぜだか自然と瞳から温かいものが溢れてきた。ガツ、とジューの白衣を掴んで、わたしは泣く。

「よしよし」

『ふえ、つジューおアード……』

嬉しくてたまらなくて、わたしはボロボロと涙を流す。ジューは優しくわたしの背中を擦ってくれた。別にそう言う知識がないわけじゃない。結婚のこともそうだったけど実際そうなるまで実感が湧

かないものだ。このお腹の中に新しい生命がいるなんて、何だか不可思議な気分。

「あ、どうだった? ヴェリテちゃん?」

『えと、その……妊娠してたみたい、です……』

泣き止んで廊下へ出れば、ずっと待っていてくれたのかバルンさんがいた。彼はやっぱりか、と確信したように笑って言う。分かつてたなら言つて欲しかったんだけどなあ。

「これからは無理せず定時に帰つていいからね」

『えつー、そ、そんな、大丈夫ですよ……』

帰る途中、そんなことを言われて慌てて手と首を振る。ただでさえ毎日が忙しいのに気を使わせるわけには行かない。世界中の人们に認められるには成果が必要。だから少しでも役に立ちたい、とう思つていたら何故か田の前にアルフレドがいた。めっちゃ息を切らじして。

『ア、アルフレド……？』

「バルンから、お前が、た、倒れたって、聞いて……歩いて平氣  
なのか！？倒れたときどこか打つたりしなかつたかー…どこも痛く  
ないか！？それにそんな薄着して！…」

『変態つ…！』

ガシッと肩を捕まれてから身体をまさぐられてわたしは鉄扇を降り  
下ろす。なんでアルフレドがここにいるのよ。ってか倒れたって何。  
と、踞るアルフレドの隣を見れば、バルンさんが満面の笑みを浮か  
べて立っていた。成る程、バルンさんの仕業か。いつの間に連絡し  
たんだか。

「ヴェリテちやん、今日はもう上がつていよい。僕はまだ仕事があ  
るから帰るね。それじゃあまた」

『え、ちよ、バルンさん…？』

引き留める間もなくバルンさんは行ってしまった。わたしも仕事残  
つてたのに、いいのかな。なんか凄く気が引ける。

『アルフレド、仕事は?』

「ヴェリテが大変だつたらもう上がつていひつて言われた」

仕方なく彼を振り返つて見れば、殴られた場所を擦りながら答えた。何と言うか、心配してくれるのは嬉しいけど、仕事も大切にして欲しいなあ。

「で、結婚いつなの」

『あーうん。ちょっといじや言ふ憎いから、家、帰らない?』

笑うわたしを見て心配そうな顔をするアルフレド。ちょっと焦らすくらいいいわよね。隣を歩くアルフレドをちらりと見て、や、と手を繋いだ。

『ただいまー』

「ただいま」

やつと歸ってきたわたしたちがソビングへと足を向ける。持つてい  
た鞄を下ろすと、ひょい、とアルフレドに抱えられた。

『わやあー?』

「ねむ、今日は可愛い声      待て待て鉄扇構えんな」

そのままアルフレドはソファーに腰を下ろし、わたしは彼の膝の上  
に座られる。しかも向かい合わせで。なんだこれ恥ずかしいんで  
すけど。

「はい、教えて」

『こわなりですか』

「だつてもー心配で心配で仕方ないの」

じつ、と彼の薔薇色がわたしを映す。わたしはそれに引き込まれるようアルフレドの唇にキスを落とした。何度も、何度も、角度を変えて、愛おしさを込めて。

「う、なに。誘つてんの？」

「ビルに笑うその口元、もう一度唇を重ねて、わたしはアルフレドに抱きつぶ。

「……どうした、ヴォリト」

『……うん。アルフレド元、言いたいことがあるの』

ぎゅう、と力を強くすれば、アルフレドも同じようく抱き締めてくれた。

「なに、ヴォリト……」

『あの、ね……ん……た』

「は?」

聞こえなかつたのか、聞き返してくるアルフレド。なんか段々恥ずかしくなつてきた。でも言わなきや、よね。わたしは覚悟を決めて身体を離して、彼とおでこを合わせる。

『赤ちゃん、出来た……』

「…………ま?」

抜けたよつな声でわたしは頬を真っ赤に染める。もつ言わないから、と皿を反らせばそのまま口付けられた。滑り込んできた舌は、わたしの舌を捕らえて逃さない。僅かに出来た隙まで息を吐けば、わたしの腰を抱く力が強くなる。

『はあ、あ、ふあ……んつ』

「ん、は……つ」

荒々しさの中でもひやんと優しさがあつてわたしはただただそれに  
応えようと必死になる。やがて苦しくなってきた頃、名残惜しい銀  
色の糸を引いて唇が離れた。

『アルフレド……』

「あー やべー、めちやくちや嬉しく……」

「うそ、と再び額を合わせてわたしたちは視線を交わす。彼の薫色  
の中にはわたしの翡翠があるのがハッキリと見える。

『ほん、と…?』

「当たり前だろ。今にでもお前を抱き上げて、ましゃ回つてしまえ」

『…ふふ、想像出来る』

あの場で言つてたらそれでたな、とわたしは笑う。ぐい、と引っ張  
つてわたしを膝立ちさせ、アルフレドはわたしのお腹に耳を当てる。

『まだ聞こえないわよ』

「それでもいい……」元は新しい生命があるんだ。俺とヴェリテが生んだ、小さな命……」

『うん……わうだね……』

そつとアルフレードを優しく包むと、確かにウズウズしてゐる感じがする。ほんとに喜んでくれてるつてことが分かつて、それがまた凄く嬉しくて。わたしは涙を流し、小さく、ありがとう、と呟いた。

ゆめいろきみこころ

もうわたしひとりの身体じゃない。  
この命はわたしたちで守らなきや。

(ビーフショウヴェリテ俺めっちゃ誰かに言ひ触りしてえ)

(ちよつとは落ち着きなさい)

(いや、だつて俺たちの子供だぞ！－！絶対、ヴェリテ似で可愛いやなー！）

(あら、アルフレド似でカツコイイかも知れなくてよ)  
(もうお前が可愛い)

妊娠発覚編です（^\_0^=^\_0^=）

あ、妊娠の症状とか間違つてません、よね？ソワソワ  
一応軽くは調べました、当たり前に経験ないですから…  
そしてやつぱりヴェリテは誘い受けじやないかと思うんですね、はい  
そのままアルヴィンに喰われ…げふんげふんなんでもないです

この前にR-18を書きましたが、タグ付いてないんで載せれないで  
すよね（・・・）  
つてことで、こちらに載せました。  
ご閲覧は自己責任となります。

action=ppgg&amp;stid=18&amp;bkid=1052248&amp;bkrow=0&amp;pw=&amp;ss=&amp;bkpw=&amp;ss=&

2011.11.09

月詠輝夜

## ゴーフォリアの音色

トクン、トクン、と

わたしの心を踊らせるのは

何氣ない小さな幸せ

トントントン、と台所からリズムのいい音が聞こえてくる。わたしはリビングのソファーに座つて、そ、とお腹を撫でた。あれから五ヶ月と半月が経つた。妊娠が発覚したのが三ヶ月。つまり後約半月でこのお腹の中の命が生まれる。やつぱり実感ないな、と小さく笑う。何度かイル・ファンへ定期診察に行っていた。生まれてくるのは双子だそうだ。男の子か女の子かは聞かなかつた。

『アルフレード』

「はいはい、もう少しでできるから待ってなさい

『はーい』

お腹減ったなー、とわたしが窓を見やると、丁度シルフモドキがやつてきた。窓を開けて招き入れると、わたしの肩に止まつてすり寄つてくる。ありがとう、と背中のポシェットに入った手紙を取つて代わりに送る手紙を入れる。お願ひね、と笑えば、まるで返事をするように小さく鳴いて飛びだつて行つた。

「誰かいる?」

『ジユードせんせーから。えっとね…あ、今日何曜日だっけ?』

「火曜日だり

『じゃあ今日みんな来るわよ』

は?と首だけ振り返つてわたしを見るアルフレド。だつて手紙にそ  
う書いてあるんだもの。数年前、一緒にこの世界を旅したメンバー

が遊びに来る。それだけでわたしの頬は緩みっぱなし。

「まーた邪魔しに来んの?」

『邪魔つて何よ』

「俺ヒヴェリテの甘ーい休日を」

言いながら笑う彼に小さく溜息を吐いた。最近は産休で家にいるから、夜はいつも一緒にいるじゃない。やがて食事が出来たみたいで、アルフレドはお皿に盛りつけた料理をリビングに持ってきた。直後、家のインターホンが鳴り、彼は少しばかり眉を潜める。

「ビー・セ・ジ・ユードたちだろ」

『わたしが出てくるわ』

「いいよ。お前はそこで待つてろ

優しく頭を撫でられ、わたしは素直に頷く。そう言えれば子供が出来たって言つてからアルフレドはいつも以上に心配性になつた。わたしの体調を一番に気遣ってくれたり、たまに仕事の合間にわたしに

会いにに来て様子を聞いたり。心配しそう、って言つたら落ち込んだ彼はなんだか可愛かつたな。

「ヴェリテーつー！」

『久しぶづ、レイア』

パタパタ、と足音が聞こえてきて、一番にリビングにやつてきたのはレイア。わたしのお腹を見て目を輝かせていた。

「ふおおおお…一ほんとにお腹おつきい…」

「あ、レイア、あるいです…！」

続いて来たのはエリー。おいで、と手招きすれば嬉しそうに駆け寄つてくる。

「もうこんなに大きくなつていたんですね…！」

『ふふ、わうよ。あつという間だつたわ』

エリーとレイアはわたしの両側に座り、触つていい?、といづりづした様子で問いかけてくる。頷けばおずおずとお腹に手を伸ばして、優しく撫でてくれた。そして最後にジユードヒローハンがわたしの傍にやって来る。

「ヴューリト、調子はどう?」

『あら、ジユード先生。とても良くなつてよ』

先生なんてやめてよ、ビジユードは微かに頬を染める。

「まつまつま、少し見ない間にこぞりこ綺麗になつましたね、ヴューリテさん」

『やだ、ローハンも相変わらず素敵よ』

久しづりにみんなが集まつた。あの旅が凄く懐かしい気がする。少し前までは一緒にいるのが当たり前だったのに。

「ねえ、もうすぐ産まれそうー。？」

『あと半円くらいかしい』

「半円…一楽しみですねー。男の子ですか？女の子ですか？それとも両方ですか？」

「ヴォリテが産まれてからの楽しみだーって聞いてねえんだってさ」

アルフレッドがわたしの頭を軽く叩いて言えども、気になー、とレイアは足をじたばたさせる。その時、微かにわたしのお腹が鳴つて、少しばかり食事の時間をもらつた。食べながらもみんなと会わなかつた分の話をする。

『あ、動いた…』

そんな中、違和感を感じてふと咳けばレイアとエリーが真っ先にわたしのお腹に手を当てる。

「わわわわわっ…動いてる…。」

「不思議、です…」

「ほう、と感嘆の息を吐いて一人はお腹を撫でてくれる。

「ちよ、あんまり触んなつ俺まだ触つてない…。」

「レディたちに嫉妬は醜いですよ、アルヴィンさん」

自分も、とわたしに手を伸ばすアルフレッドだったが、ローハンに言  
われて言葉を詰まらせる。

「アルヴィンはいつもでも触れられるじゃないですかーわたしたちは  
なかなか会えないんですから」

「モーだよねー今日は嫌と言ひませじガーリテに触れちゃつよー。」

ヴェリテー、トレーヤはわたしの腕に絡み付いてくる。するビジュー  
ードが呆れるように彼女を見て溜め息を吐く。

「レイア、ストレスになるよ！」とほしゃダメだからね

「んもう……相変わらずジゴードは心配性なんだから！大丈夫だつて……ね、ヴヨリテ！」

『ふふ、勿論。今日は思いつきつ甘えてもいこわよ。ほら、エリーも』

そう言えども、やつたー！、と反対側の腕を組んでくるエリー。まるで妹のようなふたりを愛おしそうに見つめると、アルフレッドが後ろから抱きついてきた。

「アルヴィン、邪魔です」

「お前らだけつーの。俺だつてつと我慢してたのに」

『いい加減になさい』

ぐ、ヒエリーがアルフレッドを押し退けるが彼は離れようとしない。まあ実際最近は一緒にいるだけのことが多くて、お互い触れることあまりしなかった。

「アルヴィンさん、ヴェリテさんが嫌がつてますよ」

「嫌がつてねーよ」

『嫌がつてゐわよ』

にっこりと笑えつて言えば部屋の隅に踞るアルフレド。今日は旅してた時みたいにみんなと一緒に過ごしたい。久しぶりにジユードのご飯も食べたいし、ローランの淹れたハーブティーも飲みたいな。レイアとエリーと沢山話して、それからミラと、笑つて。

『そつか……足りないんだ』

「え? 何が?」

『……ううん、何も』

忘れてたわけじゃない。ただ改めて思うと凄く寂しくなつてくれるんだ。この中にミラがいて、初めてこの心が埋まつてくれる。今はもう会えないから、ずっと穴が空いたままかな。

ねえ//ハ、わたしもさすがママなるのよ。やつしたうお祝いしててくれる?一緒に喜んでくれる?この子たちを、守ってくれる?

『//ツも見ててくれるかな』

「うそ、嘘だ

ジユードが言つてくれるとなんだかほんとこそんな気がする。今も凄く幸せだけビビ、もう一度、あの頃に戻りたいなとも思いながら、そ、っと右手の指輪に触れて、わたしは笑つた。

## コーフォリアの音色

みんなの光が、凄く温かい

(ね、名前は!?)

(ふふ、秘密よ)

(えーー・ヴーリーテの意地悪ー! )

(わたしはこいつもいりつよ、レイア )

(元気にしてますよ! )

(ありがとう、ヒリー )

(絶対可愛いう子だと思つますーー )

(この子たちが産まれたらエリーはお姉さんね )

(お姉さん… …はこつ )

(じじいはひいじじいですか… 長生きをするものですね )  
(あら、まだまだローハンには長生きしてもらひわなきや )

(おや、勿論そのつもりですよ )

(相変わらずね、ローハン )

(ヴーリーテさんこそ )

(なんかあつたらちやんと病院に来なきやダメだよ~ )

(わかってるわ、ジユードスマ )

(だからマヤじゃなこつてばー )

(心配してくれて嬉しいわ )

(…もう、ガーリーテつたら )

(ヴーリーテ、構つて )

(もづもづつと我慢なさこ )

ちよつと書いてみた世の上の田舎( < ウ > )

みんなウヨリ元の心配して会いに来ました!!

卷之三

そんな中みんながヴェリテに引っ付いてればいいんだ（^p^）

完全なアル憫、

ノルマニ

三  
バ  
バ

レイア 次女

エリーゼ  
三女

口 - ジ  
かみそり

あれ、アルワインだけ仲間外れのようだな？ まあいいか（^\_0^=）

2011.11.13

月詠輝夜



「」の手に抱くふたつの愛色

舞う雪のように

ふわり、ふわりと

舞い降りたふたつの灯火

船がイル・ファンに着いた途端、俺は一目散に病院を目指した。ヴェリテが、大丈夫だから仕事行ってらっしゃい、とにつこり笑つて言うもんだから仕方なく仕事に行つた俺だったが、その五時間後、ジユードから急ぎの連絡があつたのだ。今朝、ヴェリテの笑顔に負けて行つたのが間違いだつた。今日は大事な仕事があつて、それをヴェリテも知つていたんじゃないだろうか。平然としていたが凄く辛かつたに違ひない。

「あの馬鹿……！」

ジユードによれば、今朝の時点ではあつたが一時間に五回ほどの痛みがあつたらしい。それから数時間後、五、六分置きに痛みが来て、今までと痛がり方も違つたそつだ。纏めなくとも分かるだろうが、産まれるってことだよ！

俺が病院に着いたとき、出迎えてくれたのはジユードだった。息を整えてる暇もなく俺の腕を引っ張り、早足で分娩室へと連れていかれる。やはり怒っているのだろう。お互い無言で着替えて入れば、苦し気なヴェリテの声が聞こえてきた。

「ヴェリテ、……！」

名前を呼べば、消え入りそうな声で俺の名を囁くヴェリテ。額にはうつすらと汗が滲んでおり、辛そうに眉を潜めていた。遅れて悪かつた、大丈夫だ、と俺はヴェリテの手を強く握る。

『だい、じょぶ……だから……』

「ああ、わかつてゐる……」

こんなとおりで笑う彼女が愛おしくて、そつと頬を撫でてやつた。

そして約一十分後、この世に新たに一つの生が誕生した。ヴァリテと同じ銀髪に翡翠の瞳をした男の子と、俺と同じ焦げた茶色の髪に鳶色の瞳をした女の子だ。

『可愛い……』

分娩室から病室に移動したヴァリテは、両側の小さな揺りかごで眠る双子を見て嬉しそうに笑う。ながらその表情は、母親、と感じさせられた。俺はと言えばジュードにこいつほど叱られたんだが。でもやっぱりヴァリテが庇ってくれて、俺情けねえな、と肩を落とした。

「名前、どうするよ」

『ふふ、実はもう決まつてゐるの』

は？と抜けた声を出せば、ヴュリテは双子の頬を優しく撫でた。

『男の子は、アルベルト』

「…」

『女の子は、ウェスター』

あ、と小さく声を上げる。今俺の中にはなんとも言えない感情が渦巻いていた。俺は不思議そうに見るヴュリテから手を反らす。

『変、かしら。アルフレッドとわたしの名前から取ったのだけれど…』

『いや、そうじゃなくて……ただ、俺も同じような名前、考えてたから』

同じような、じゃなくてまんまなんだけど。もし男の子と女の子の双子が生まれたのなら、この名前がいい、と一人ではしゃいでいた

のがまだ記憶に新しい。

『アルフレド、抱いて』

「はー? おまつ何いつ……あ、子供をね……」

『バカ』

仕方ねえだろーが。暫くお前に触れられてねえんだから。口を尖らせて言えば額を小突かれた。すみませんね、俺の脳内こんなんで。

『はい、パパ』

「! パパ、か……」

俺はヴェリテの腕からアルベルトと名付けられた男の子を抱き上げる。すやすやと眠るその表情は確かにヴェリテに良く似ている。

『一卵性双生児ですって』

「アルベルトはヴェーリテ似だな」

『ウェスターはあなた似ね』

髪の色から瞳の色までそつくりで、ああ、俺たちの子なんだな、と改めて思うと何だか自然と頬が緩んでくる。小さな手のひらがギュッと俺の指を掴む。

「赤ん坊ってこんなに小さえんだな……」

『ええ……だからこそ親であるわたしたちが守らなくては』

「そうだな。これから沢山色々なものを見て、色々なことを学んで行く。俺たちが築いた未来で、ここからは生きるんだ」

まだまだ世界には認められないことばかりだ。でも、ヴェーリテやジューード見たいに諦めないやつがいるから世界は変わっていくんだと思つ。

『//ハ、見てるかな……』

「ちゃんと近くにいるわ、きっとな」

『うさ……』

わたしまになったのよ。そりって、まるで//リテ報酬するよつ  
に弦ぐヴェリテの姿はもう見慣れた。例え離れていても心は繋がつ  
ているんだ、と彼女はいつも笑う。そしてそれに応えるかのように、  
アーリーナのから優しい風が吹き付けた。

『あ、いい風…… //ラかな』

「祝福してくれてんだろ」

ふわり、と下ろしたヴェリテの髪が風で揺れた。田に滞りされてキ  
ラキラと光る銀髪に田を惹かれる。ああ、女は子供を産むと綺麗に  
なるつて呟つが、間違いねえな。今のヴェリテはいつも以上に綺麗  
だ。

「ヴェリテ」

『ん?』

「愛してる

そつ愛しさを込めて囁けば、久しぶりに真っ赤に顔を染め上げるヴ  
エリテ。少しだけ目を泳がせてから、わたしも、と彼女は微笑む。  
とびっきりの笑顔で。俺たちの腕の中で、子供たちも笑った気がし  
た。

「この手に抱くふたつの愛色

優しく、暖かい新たな生命

よく、分かんない（^\_0^=三^\_0^=）

例の「J」とく当たり前に経験ないから色々すつ飛ばしました  
漸く双子が誕生しましたよつ！

沢山のアンケート「J」協力ありがとうございました、

取り敢えず名前は変換ないのですが、あつたほうが良いですかね？  
アルヴィンも、ヴェリテもこれから親ばかになつて行くんですよ、きっと！

あとはP-Tメンバーとの絡みも書きたい(\*ノノ)  
ただ、妄想はあるんですけど文章に出来ないとゆーね！  
誰か文才分けて下さい(・\_・)

次回もお楽しみに

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9119x/>

---

交わる無限の愛色世界～テイルズオブエクシリア～

2011年11月19日22時59分発行